

# 全自者協ニュース

- 全自者協ニュース/第7号/1995年(平成7年)7月1日
- 発行所=全国自閉症者施設協議会    • 事務局 ☎0593-94-1595
- 発行人=石丸晃子                      • 編集人=川相智史

## 30年のながれの中で

第二ともえ学園長 前岡孝司

ともえ学園が三次病院の児童病棟から、この地にオープンし数年後、亡き武村一郎先生(前理事長)から聞かされたことがある。「親子心中を防ぐためにまず親を救おう。そう思って学園をつくった」と。自閉症児とその親にとって昭和40年代前半はそんな時代だったらしい。

「親の生活を保障してくれる(そうな)先生」の出現に親御さんたちは手を合わせた。そしてしばらくの間、子どもを手放した自責と安堵を噛みしめた。しかし、反動はすぐにやってきた。武村先生が様々な要求を寄せられたのである。

「子どもの外泊は絶対必要。必ず実行のこと」「月に2日は学園の手伝いを」「行政機関に窮状を知らせるべし」などの注文が相次いだ。

親御さんたちは「人質をとられとるんじゃけえ、文句は言えん」と、療育や陳情に奔走した。他方、職員にも「国の定数だけではこれだけの子どもらの面倒は見れん」と法定の2倍近くの職員を確保しながらも、「今の措置費ではこれ以上は難しいんよ」と、薄給の弁解をされることも忘れられなかった。「僕みたいな医者には自閉症は治せん。あんたらこそプロにならにゃ」と言われると、親も職員も「なんか、だまされているような気持」を打ち消しながら、新しい取り組みに燃えた。訪問指導、親子旅行、兄弟会、月例作業、療育キャンプ。家族参加の企画が次々と実行に移された。

強引を通り越して滅茶苦茶ともいえるやり方に見えたが、子どもたちの様子は少しずつ変わり始めた。きちんと座って食べ、シャンプーもできるようになった。名前を呼ばれると返事のサインも出る。種々の園内作業もこなすようになった。自傷も破壊もパニックも減った。外泊中もさほど手がかからなくなった。そして、それと平行して親御さんも微妙な変化を見せ始め

た。「ホンネ」の逆襲である。

まず、「今回はちょっと…」「申し訳ないけど…」が出始めた。家族の病気、冠婚葬祭、就職、転居など、普通の家族の普通の事情が学園への足を遠ざける。「何はさておき、この子のために！」という「気合」は少しずつ弱まっていった。誰も非難できない、仕方ないことに思えた。

次いで、「あの子と同じようにやってもらえればウチの子も…」とか「あそこのやり方、新しいみたい…」「今年の担当はハズレ！」なども出てきた。「先生もっと頑張って(くれないから、少しも伸びないじゃない)！」などの声も聞こえるようになった。親子共生状態から開放されて自由な時間がもてるようになった親御さんたちが、新しい情報を仕入れ、我が子を取り巻く現状を分析するゆとりができたことを、私たちは喜ばねばならなかった。

そして、「学園の事情はよくわかりますけど(親の事情も少しは考えるべきだよ)」「(前から言われていたのは憶えているけど)急に今すぐ退園を勧められても面倒見る自信なんて(ないことはないけど、この子抜きで作った家族の生活が崩れてしまうヨ)」「親亡き後(そして今ももちろん)、この学園だけを頼りに(しっ放しにしたい)」との声も少しは出てくる。

私たちが腹立ち、恥じ入り、あるいは悲しむ様子を尻目に、武村先生はのたまわれた。「惚れた女も放っときゃ褪せる」。誰が誰に惚れたことになるのかはなんとなく聞きそびれた。

「まず親のために」という「逆転の発想」でスタートした学園も、そろそろ三次病院時代から教えて30年を迎えようとしている。

第8回

大会報告

第8回全自者協大会は平成6年10月20日から2日間、全国から75施設(会員施設33、非会員施設42)二百六名の参加者を集め、北海道函館市の湯ノ川グラウンドホテルで開催された。

開会式では主幹施設(社福)俵愛会の大場茂俊理事長、全自者協石丸晃子会長の挨拶に続き、北海道知事、函館市長、上磯町長、日本自閉症協会会長、北海道愛護協会会長の祝辞、また厚生省本橋紘障害福祉課長のメッセージが紹介された。引き続き石丸会長より中央情報報告があり、

①障害者基本法制定以降の障害者保健福祉施策推進本部の設置とノーマライゼーションプラン、障害者総合福祉法制定の動向

②日本自閉症協会との連携の中で、自閉症の定義についての学会公式見解、全国実態調査をもとにした自閉症問題のアピール、自閉症センター、などのモデルプラン  
③三菱財団助成による職員研修マニュアルの作成

などについて報告が行われた。さらに石井前会長からは、それらの背景としての社会保障制度や財源問題にかかわる動きについて補足報告がなされた。

続いて、施設実態調査委員会の吉田一誠委員長より施設実態調査の中間報告があり、その後4分科会に分かれ、報告と討議が熱心に行われた。

第1分科会は、「家庭と施設の連携について」のテーマで報告、討論がなされた。

第2分科会は、「生活と余暇」について、施設の実態調査を資料として討議がなされた。

第3分科会は、「自閉症者に作業をすることの意味」に焦点が当てられた。自発性を育てるにはどうすれば良いか、興味を持たない人への動機付け、就労への方向付けなどが議論された。

第4分科会では、「行動障害への対応」のテーマで3施設から問題提起された。強度行動障害は生活の中で人が絡みながら生じており、生活自立や社会化、社会ルールなども「人とのかわり」の中で実践されていくことの必要がいくつか確認されてきた。

2日目は、まず各分科会の報告

がなされ、続いてわかば共同作業所の河島淳子先生より「自閉症児とともに―母として、小児科医として―」と題した記念講演が行われた。先生は、長年の実践と体験の中で作り上げた科学的で現実的な療育の体系を展開され、各施設現場の実践に大きな示唆と励ましを得るものでした。

北海道地区の皆様方の努力で、充実した2日間にわたる研修・交流を終えることができた。

次期主幹施設は、埼玉県の初雁の家が担当することになった。

(奥野 宏二)



総会報告

全国自閉症者施設協議会の第7回総会が、去る5月30日午後6時より東京(財)商工会館で開催された。

議長にすすみ学園土肥豊氏が選出され、星が丘寮寺尾孝士、塚脇学園福永政次両氏を議事録署名人に議事が進められた。

平成6年度事業報告、決算報告に引き続き、平成7年度事業計画

案、および予算案が審議され、原案どおり可決された。

さらに会則の改正が審議され、本協議会の「全国自閉症者施設協議会」への名称変更、役員規定の改正等が審議可決された。

役員の変更は任期満了にともなうもので次のように選出された。

- 会長 石丸 晃子
- 副会長 石井 哲夫
- 理事施設 星が丘寮
- 袖ヶ浦ひかりの学園
- 東やまた工房
- うさか寮

- あさけ学園
- 第二ともえ学園
- 三気の里
- いすみ学園

川崎市くさぶえの家

以上の議案の審議、承認等がなされた後、大会開催について、今年度主幹施設、埼玉・初雁の家から今年度の大会内容につき説明、提案等があり、討議がなされた。また、次期主幹施設には愛知・泰山寮が推薦された。新会員の紹介、各施設の情報交換の後散会となった。

(川相 智史)

## 特集

## 今日から明日へ

自閉症者施設も大きな節目をむかえている。利用者への社会参加、さらには地域にひらかれた施設へと。そんな加盟施設の近況は。

## はぎの郷

「1×47 47+8」

「はぎの郷」は平成1年6月に設立されたから、今年で7年目を迎える。だから、職員も多くは、十の位が一つ上がってしまった。かろうじて元の位にしがみついているのは、大学まで順風に現役できた少数の輩ぐらいだ。一方、仲間間の平均年齢も23才になった。りっぱな成人だ。設立当初の写真と今を比べてみると、みんな貫禄が付いてきている。だが、調子に乗って「あのあどけない顔の○○さんは、どこへ行ったのでしょうか?」などと冷やかさうものなら、「自分の顔を見てから言え」と猛反撃を食らう。

さて、こんな「はぎの郷」で、出番を虎視眈々と狙っている集団がいる。この人達を称して「親父」という。従来から年に一度12月に「親父」だけが全員集合し、その夜は飲みや歌えのドンチャン騒ぎ

翌日は日頃私たちが手の届かない場所の掃除や営繕を一気にやり遂げ、意気揚々と帰宅するのを常とした。が、酒の効用とは恐ろしいもので、昨年の会で「あれもやるか/ここもやるか/運動場の排水管も埋設しよう!」と壮大な構想にまで発展してしまったからたまらない。行き着くところまで行ってしまった。即ち「春のゴールデンウィークにやるか/」。かくてこのゴールデンウィークにはお父さん兄弟たちが大集合、シヨベル3台、掘削機1台その他日頃見慣れぬ機械があちこちに登場して、3日間にわたる大工事があちこちで敢行されたのである。

それぞれの職場で普段若い部下を使って、指示しまくっているだろうと思われの人達が、みんな汗水垂らして、新米兵になっているのは傑作でもある。

日常のかかわりでは、どちらかというととお母さんが主流であった「はぎの郷」だが、いつの間にか

「ワシのことも忘れんでくれ、ワシもできることがあるぞ」と少しずつパワーアップの親父たち。

一人一人の力は微々たるものであっても、みんなで強力な力を出し始めた親父たち。どこまでパワーアップするのか密かに楽しみにしている僕は、そのやましげな心を見破られ、屋根の上に取り上げられてのペンキ塗りを命じられたのであります。

(中島 章雄)

## なにわ学園

## 「学園の紹介と近況」

私達の学園は、大阪の南部、金剛・生駒山系のおとところ。歴史的にも由緒ある羽曳野の地にあります。周囲は、ぶどうの産地で、秋になると辺り一面、ぶどうの実が風に揺れております。立地条件は良く、近鉄教育大前駅まで徒歩15分。同じく国分駅まで20分程で、買い物、外出も徒歩で行くことができます。また北へ徒歩10分程の所に、中小企業団地があり、現在1社から外注作業を頂いていますし、別の所へ、男子2名が実習で働いています。学園開設は、平成2年12月1日。現在の入所者の状

況は、最重度25名、重度19名、中度6名となっており、その内、自閉もしくは自閉的傾向とされる人が22名います。大阪府下でも、これだけの自閉的な方の多い施設はないであろうと思います。

処遇モットーとしては、これだ/というものはありませんが、ルールの限度を越えそうな時には制止するというのが基本的なことになっています。

当初から3年目は、ガラスにまつわるケガが多かったが、現在は、保護者方のご協力により強化ガラスを設置したことによりガラスによるケガも減少(ほとんどない)しました。学園の目標も他施設と変わりないものですが、作業面では1対1の指導が大事であり、細かい対応をしてゆかねばなりません。本年で5年目を迎え、入所者も職員も互いの思いが少しずつ理解できてきたと思います。

これからが次のステップを考えて行く時であると思います。諸先輩方の施設を参考にし、少しでも入所者の豊かな生活を目指してゆきたいと思っておりますので、今後ともよろしくご指導の程、お願い申し上げます。

(麻 誠之助)

秦寮山

「朝から夕方まで作業」

「ガッシャン／＼ガッシャン／

高い天井、大きな窓、白い壁、整えられた机。その空間をダンボール梱包機の音が響いています。

D棟は通称「作業班」と呼ばれ朝90分、昼90分、夕方60分の合計4時間を、一日の生活の中で作業時間として費やしています。

寮生は、20～24歳が26人。25歳以上が24人という年齢構成で、社会復帰が望まれており、そのため日常生活訓練の他に、午前・午後を通して作業を行うことにより、社会生活に適應できる能力を助長していきたいと考えています。

目標としては、①仕事と報酬の関係を理解して、働く喜びを知る。②さまざまな作業に対する適應能力を高め、持続力・集中力を身に付ける。この2点に重点を置いていきます。

「作業終り。掃除をしてください」「それでは〇つけをします。〇〇さん、よく頑張りましたね、〇です」

このように壁に貼られた報酬表

に作業終了毎に〇印をつけています。〇印が一定の数に到達すれば喫茶店などに掛けています。

(昨年度は30個、今年度は百個) まだまだ反響は今一つですが、寮生の中には、「まる、まる」と要求してきたり、〇印を30個ももらった寮生が喫茶店に行くことを知った他の寮生が随分気にして、「喫茶店行けんかったよ」などと話し掛けてくることもあります。

作業は、寮の近所にあるダンボール工場と自動車用部品の下請け工場から仕事をいただいています。ダンボール作業は、箱の仕切りを作る作業ですが、「枠を取る」「ばらす」「組み立てる」「並べる」「数を数える」「縛る」など単純な作業ですが、寮生にとってはいろいろなと訓練になります。

自動車用部品作業は、細長いゴムにアルミのリングを手ではめる仕事ですが、はめる位置が1ミリと決められており微調整が必要な作業です。

今後は、作業時間内に椅子に座って仕事ができる持続力・集中力の他に、奇声や多動寮生の中でも作業ができるように訓練をしていきたいと思っています。

(岡村 優)

みずほ寮

「みずほ祭り実行委員会に参加したい人、手を上げて」

6月4日は「みずほ祭り」。今年度は第5回目です。月日のたつのは早いものです。

「みずほ祭り」は、みんなの祭りです。園生、保護者、職員、地域の人々、他施設、学校、行政、勝浦市民まで巻き込んだ「祭り」になってしまいました。

今年から、みずほ祭り実行委員会をつくることになりました。参加者は、理事長、園長、指導主任、親理事1名、地元理事2名、区長、区青年会長、後援会長と副会長、保護者会長と副会長の大会所帯になんと園生代表2名も参加しています。

委員会の会議は2時間もかかりません。相談する事は山程あって公安協の事務局長は車の整理に困り果て、保護者会長は市内のピラ配りの手順で悩んでいます。

園生にはわかりにくい内容も多いのですが、今年の模擬店は園生がやるのですから、居眠りしている訳にはいきません。焼き鳥やおでん、焼きそばの話になると、多少不安そうな、でも期待に満ち

た目付きになって真剣に聞いています。きつと当日は、そのいの帽子にエプロン姿で懸命に焼きそばを作ったりしている筈です。地域の人や園生が実行委員会に参加してくれて本当によかったと思っています。

「みずほ祭り」に限らず、みずほ寮の将来は親や地域の協力をどれだけ得られるか、ということにかかっています。

親と学園が知恵を出し合い、試行錯誤しながら工夫を凝らし、協力して活動して園生を地域のなかに自然に溶け込ませるという事をやりたいのです。学園の力だけではこれはできません。

地域の協力を得る活動といっても、自分の子どもを将来のみを考慮する親がいるとすれば、結構しんどい活動になる場合もあるでしょう。しかし、みずほ学園の親たちはどういふ訳か家族的な凝集力が強く、園生全体を我が子として考えてくれる人が多いのでとても助かっています。

みずほ学園は、職員と親の両輪により推進され法人が舵を取る、そんな施設になれるだろうと思っています。

(森本 照雄)

## くさぶえの家

## 「くさぶえの家のこの頃」

平成元年に開所した当園も7年目を迎え、この4月に岩村政治が3代目の園長として赴任しました。開園当初は地元の反対により、入所者全員がバスによる送迎を課せられるほどでしたが、現在では地域の理解も進み、歴代園長が町内会の監査役を勤めるようになっています。

平成5年からは、橋地区（人口約7万人）子ども会連合会、子ども文化センター（児童館）とともに合同のお祭りを開催しています。くさぶえの園生は3グループに別れてゲームコーナーで地域の子どもたちとふれあい、そこでの収益は子ども会活動のために寄付しました。日常的にも、作業で出てくる段ボールをまとめて、子ども会の古紙回収活動に提供しています。職員と園生がともに会社に出勤して働く園外実習は、不況のため途絶えがちでしたが、3月よりM製作所、5月よりT工作所での実習が始まりました。会社に行く仲間姿を見て、園内に残った園生にも意欲ある行動が多く現れるよ

うになってきています。また、保護者の理解も得られ、2名ハローワークに求職登録をしました。一般就職したいという園生の気持ちに、なんとしてでも応えたいと思っています。

市内唯一の専門施設として、困難ケースと言われる人たちを受け入れ、地域でより良い生活が営めるよう援助するのが当園の役割です。昨年度は粗暴行為などのため他施設で困っている2ケースを、職員と共に短期訓練で受けました。問題行動は解消し、予後も順調なようです。

入所希望者に対応するため昨年定員増を行いました。本年度新たに2名入所したことにより、25名いっぱいとなりました。6月に更生相談所、各福祉事務所を巻き込んで、ケース検討会を行います。縁を切るつもりは全くありませんが、安定したケース、当園の援助が一応必要のないケースについては、ケースワーカーに主体的に働いてもらい、本園の役割を果たしたいと考えています。

(丸山 尚)

## すだちの家

## 「地域に根差した施設づくり」

すだちの家では、30名の入所者が現在以下のような作業メニューに取り組んでいます。

- ① 焼かない編む陶芸
- ② 紙製品の加工（外部委託）
- ③ プラスチック製品の加工（外部委託）
- ④ 野菜の栽培
- ⑤ 石焼き芋の街頭販売

今回は、現在準備中の6番目の作業メニューである「わさび」栽培について少し詳しくご紹介したいと思います。

施設のある東大味町は施設建設の際には、大多数の住民から反対の声が上がったり、施設開所に当たって地域内での迷惑行為を絶対にしないことなどの覚書きが取り交わされる苦難のスタートでした。しかし、日常的な交流や入所者の生活ぶりを通して次第に理解をいただき、昨年、地域の中で農地を借用させていただき野菜の栽培を始めました。今春よりは、村の山にある沢を使って「わさび」の栽培を始めました。

これは、村と施設が一体となっ

て「わさび」を村の特産品として育て、地域の活性化につなげようというものです。当地域内には、たいへんお元気な老人方も沢山いらっしゃいます。農閑期になりますとご婦人も手が空いてまいます。そこで、この「わさび」を共同で栽培し、加工品を製品化して収益を上げるといふ経済的な効果も狙っています。村の沢では村人と一緒に植え付けたわさび苗が順調に成育しています。その他①の焼かない編む陶芸活動の拠点となるアトリエの地域建設構想も村の活性化事業のマスタープランに盛り込んでいただく等、開所当初には予想もできなかった嬉しい変化が見られてきています。

私たちは、すだちの家が来た事で村が活性化して良くなった、障害者と一緒に作業する中で身近に感じ、相互理解が進んだと言われような地域に根差した施設づくりに積極的に取り組んで行きたいと考えています。

地域の人たちも施設の人たちも対等な立場で一緒になって大きな夢を実現させていきたいと思えます。

(酒井 与志夫)

三気の里

「三気の里の近況」

①今年の課題

平成6年4月1日より、定員が50名より30名増えて80名になりました。そのことにより日常生活、作業に大きな変化ができました。生活面では、特に入浴は毎日の事なので、職員の配置に苦労しました。またそれに伴う洗濯物の増加がありました。他にトイレや居室の清潔、健康管理など山のようでしたが、職員の創意と工夫で乗り越えてきました。作業面では作業室の確保、指導場面での指導員の数の安定、指導課題の選定など楽しみでもあり、大変でもありました。

今年「施設における自閉症者の処遇について」というテーマで、利用者80名体制下における処遇のまとめをしたいと考えています。三気の里の目的達成のために、自閉症者施設の機能(療育方針)、療育の展開、保健衛生、医学的管理、諸記録等をまとめて行きたいと考えています。

②利用者状況(H5・1現在)

合計	64	74
自閉症	57	60
一般	7	14
重度		
中度		
合計		

③作業班構成

1班	9	3	軽作業
2班	16	6	軽作業
3班	19	5	木工
4班	18	5	農耕
5班	12	3	園芸
利用数			職員数
作業内容			

④今年の主な行事

- 5月19日 全員登山
- 5月28日 開園記念祭
- 7月22〜23日 日本自閉症協会(自閉症親の会)全国大会
- 8月3日 夏祭り
- 8月6〜9日 園内職員臨床実習(自閉症実践キャンプ)
- 9月24日 運動会
- 10月13日 全員登山
- 12月24日 もちつき
- 1月15日 成人式
- 3月23〜24日 園内職員研修

⑤三気の里を訪問する方法

熊本空港から10分のところ。先ずは電話して下さい。歓迎します。

096129318100 (土井 尚典)

「にじの家」

「にじの家の出発」

「にじの家」は92年7月に開所した自閉症者中心の精神薄弱者更生施設である。埼玉県川越市内の荒川に近い田園地帯に位置しており、定員は40名(うち男性32名、女性8名)である。

開所3年目の今年3月に、ようやく念願であった作業棟が隣地に完成し、今まで住居棟で行っていた作業が空間的に独立し、煩わしさから開放され、活動が本格化する第一歩を踏み出す事ができた。障害を持つ人の親の熱意によって出発した本園が、施設としての本来の安定を得るまでには、しかし、3人の施設長の交代と多くの有意の職員を失う試練を得ている。従って、本格的な活動が軌道に乗るには、未だ時間を要するであろう。

現在、私たちが処遇の姿勢として力を入れているのが、人格と個性を尊重する「個人活動プログラム」というものである。いわゆる

インディビジュアルリズムの趨勢に学ぼうとするものであるが、これはなかなか言うは易く行は難し、である。一人一人がどんな事を好むのか、どんな作業に適性があるか、どんな娯楽を好むのか、等々を一人一人の極めて限られた表現力をもとに推測し、試行錯誤し、しかも集団との協調も同時に考えねばならない。「自閉」独特の個性への対応の難しさを考えると職員に課された課題は大変に重い。現在では、入所者がリヤカーを引いて暑い日も寒い日も缶拾い、ゴミ拾いに出る姿を見掛けて声を掛けてくれる地域の人も増えた。地域の人々とのコミュニケーションも入所者が自力で獲得してくれたいようなものであり、このようにして、初期には運営面ではマイナス状態にまで陥った状態をゼロまで引上げ、そして今ようやくプラスの方向に向かって歩き始めたところである。

人権の尊重と生活の安定に向けて、ともかくできるところから頑張ろう、と私たちは決意している。

(大矢 直子)

しもふさ学園

「地域の中へ」



下総町は、国際都市成田市の隣に位置しながらも、農業を主とする人口僅か八千三百人の水と緑の豊かな町である。

この町に開園して早8年目になる。町民との関係は、年々大きく確かなものになってきた。町主催の運動会、文化会、納涼祭、マラソン大会と楽しく参加させて頂いたり、町民の温かい援助も増え続けている。

しかし、お世話になるばかりで学園が、何か町にお礼ができる事がないかと気に掛けていたところ、町の小地域福祉ネットワークの委員になり、町の福祉の現状を知る機会を得た。

その会議の席上、独り暮らしのお年寄りの給食サービスの話しが議題となった。「町には65才以上の独居老人が、60数名いるが、設備面や人手面で、給食サービスが始められず困っている。」と。

園に帰り、厨房職員と相談した。なんとか学園で、給食サービスを応援できないものだろうか。「やってみましょう。」との答え。

「その日は、学園もお弁当にして野外の食事にしましょう。」という具合に進んだ。

こうして、一人暮らしのお年寄りのお弁当（給食と言う言葉でなく）サービスが開始された。月1回の実施でも、スムーズに時間どおりに出来上がるだろうか。ボランティアの人と連携は、うまくいくのか。そして、お年寄りの人に喜んで食べていただけるのか。

そんな心配も、回を重ねることに薄れていった。お年寄りからの涙ながらのお礼の電話も頂いた。先日は小学生が、先生と共に配食ボランティアとして来園した。

ボランティアグループで、「月1回の学園のお弁当だけでなく、私たちもお弁当を作っては配食回数を増やしましょう。」との声もあるとのこと。福祉の輪が大きくなっていくのが見え、誠に嬉しい。昨年からは始めた短期入所事業（4名枠）と、地域の療育相談事業と共にお弁当サービスは、学園の施設オープン化事業として大きな柱になっている。

地域の中で、歩みを確かなものにしたと思う今日である。

(小林 勉)

南材ホーム

「ホーム便り95 12題」

南材ホームでも新たに2名の通所者を迎え、今年度がスタートしました。月曜日から金曜日までの週5日間、午前はアルミ缶リサイクル作業（動的活動）、午後は受注作業、自主製作作業（静的活動）という2本柱のプログラムで活動を展開しています。

(1) むすび織り作業始まる

昨年度末より自主製作として、「むすび織り」を取り入れました。織り機はまずは1台のみで、通所者全員が1日に2人ずつ45分間交代で練習することになりました。新しいこの作業に皆の関心も高く少しづつ織り上げられてきた試作品が楽しみの様子。全員が交代で織っているのです、その部分毎に風合が異なります。これが、「味」とでるか、「妙」とでるか。

現在この作業は個別対応で進められています。個々の取り組める工程に応じてじっくりと対応できるので、新しい慣れない動きでも、不安がらず楽しそうに参加しているようです。試作品第1号が1ヶ月かけて間もなく完成となります。来月には織り機も増えて、作品製

作が始まります。秋のバザーには素敵な作品が並ぶはず。乞う御期待。

(2) 誕生会

誕生者のある月には、誕生会を行っています。どこかお店をお祝いしながらおいしいものでも食べよう、と始めて今年で4年目になります。が、どうも最近「おいしいもの」に目がくらみ、その日は「チョコパフェを食べる日」なんて、仲間のお祝いそっちのけの人も。

当日は午後から徒歩または地下鉄を利用して、会場となるお店に向かいます。その月によって繁華街から郊外まで、おしゃれなたたずまいの喫茶店あり、ファミリーレストランありと多彩です。会場設定の偵察のため、職員はだいぶ市内の喫茶店事情に詳しくなってきました。しかしながら、会を始め当初は在籍者も少なく、こじんまりとしたものでしたが、今では利用できるお店も限られてしまう程の大所帯となり、会場探しも難航してしまうのが悩みのタネ。皆が次の会場が決まる事を心待ちにしています。来月はどこにしましょうか。

(松浦 喜美枝)

### 石山センター

#### 「新訓練棟完成」

石山センターの作業訓練は、作業の場を生活の場と切り離し、全て棟外に求め、三カ所の作業棟に分かれて行ってきました。

しかし、センター開設後10年を経過し、その中の二階建てプレハブ造りの作業棟は老朽化が進み、昨年の10月に後援団体である和楽会（保護者会）の全面的支援と、有志による寄付により新しい訓練棟の実現を見ることができました。

新築された訓練棟は二階建て延79坪の本建築で、建物の内部としては、一階部分が入・通所者共通の作業訓練室が3室、その他トイレ、洗面所となっており、二階部屋においては、宿泊室2室、食堂居間、浴室、トイレ、洗面所となっています。

一階は作業訓練を主体とした機能、二階については、生活訓練と家族、保護者が利用できるような機能を持たせています。

特に一階の作業訓練室では作業の場と休憩の場が確保できたことや個別指導空間の確保、構造化した場面設定が容易となり、重度の知的

障害者や自閉症者を中心としたメンバーにとってより望ましい作業環境を提供する事ができたと考えています。

実際に二階の活用は、宿泊室は特に遠方の保護者が帰省時の送迎の際の宿泊や、見学者、施設実習生の宿泊に、居間にはテレビやビデオ、カラオケ、ファミコン等のゲームを備えたクラブ活動や余暇指導に、食堂は一部利用者の社会生活を想定した食事の場として、またクラブ活動での手作りおやつや調理実習の場として、さらにトータルな活用として職場実習生の自活訓練に、その他、保護者の会の会合や職員の内部勉強会、自閉症処遇研究等、多目的に使用しています。

今後、より利用者個々の生活のニーズに対する発展性を持った援助の場として、有効に活用していきたいと考えています。

(北山 泉)

### 初雁の家

#### 「新たな自立への挑戦」

##### 「福祉工場開設」

社会福祉法人けやきの郷は、昭和60年初雁の家開所以来、自立を

目指すことを基本理念として掲げ努力してきた。そして、平成元年潮寮（福祉ホーム）が開所した。福祉ホームは、制度上就労が前提となっており、福祉就労でない労働の場を保障する必要があった。

そのため、福祉ホーム開所と同時にやまびこ製作所も生まれた。その後やまびこ製作所は、収益事業に形を変え、さらに今年4月福祉工場として再スタートした。

福祉工場としてのスタートにあたって、規模を拡大するためにグループホームしらこぼとの家が生まれた。これにより、20名定員のやまびこ製作所を就労の場とし潮寮10名、しらこぼとの家7名の集団自立グループが制度的にも誕生したことになる。

けやきの郷は、初雁の家開所以来主な利用者を重度の知的障害を伴う自閉症者としており、現行制度での一般にいわれる就労自立は無理がある。そこで自立を目指すためには、いかにしてケアを保障するかにあった。もともと福祉ホームもグループホームも、集団生活への援助制度であるが労働に対するケアという視点はない。

しかし、重度の知的障害者の自立生活のためには、労働に対する

ケアを欠かすことはできない。この点を明確に位置付けたところにけやきの郷の集団自立の意味付けがある。このようにして、10年目にして重度の知的障害を伴う自閉症者の自立生活への方向性が導かれたわけだが、現行制度でのケア一度に対する限界があり今後一層の努力が求められている。

一方、初雁の家では住環境に対する根本的な見直しを始めている。10年前の建設では、4人部屋がほとんどであり、一人当たりの床面積も狭くQOLという点では劣悪な環境と言わざるを得ない。開所当初の混乱した状況下では、現在の建物もそれなりの意味があったが、個々人の生活を考えた時はすでに限界にきている。

今後の展開は、日本型施設福祉そのもの見直しと言えよう。保護、収容という発想から障害を持つ個々がいかにケアを利用するかという、利用者の側に立った福祉の実現に努力していきたい。

(佐々木 敏宏)





かいぜ寮

「こんにちは」

私たちがかいぜ寮では、設立4年目を迎え、これまでの「強度行動障害特別処遇事業」等の事業に加え、今年度より次の事業・療育に取り組んでおります。

- (1) 個別療育活動の実施
- (2) 将来構想に向けての作業班の増加
- (3) グループホーム事業の開始
- (4) 福祉連絡協議会の設立(親の会)

(1) につきましては、これまでの3つの作業グループ(窯業・織物・農耕)に加え、最重度・重度の寮生さんを対象に個々が作業に對して「見通しを持って取り組む」ことができるように作業プログラムの形成しております。このグループでは、個々の障害の程度に応じた作業課題を設定し、作業方法の分析をして内容の終始が寮生さんに理解できやすいように取り組んでおります。

又、(2) につきましては、社会復帰・自立を目標とした寮生さ

んを対象に作業グループを増設しました。このグループでは、就職するための様々な労働条件をグループ内で整備されております。このグループが今後、地域の在宅障害者の「働く場所」として広がりをもってくればという願いもあり、将来、私たちの地域で「福祉工場」が形成され、障害者も社会の中で生き生きと仕事ができるような環境が整備されていくことを期待し、取り組んでおります。

そして、今年度よりグループ・ホームを一か所開設することができました。このグループ・ホームは、地元の方々の協力もごより、行政・社協主体のホームという点でも今後も各地域に広がりを見せしていくように私たちもバックアップしていく必要があります。

しかし、このような様々な事業も私たちだけでは到底微力にししか及びません。そこで、「彦愛大福祉連絡協議会」が、障害を持つ方々の「親の会」で結成されました。ここでは、障害者のは様々な問題を施設だけに頼るのではなく、「親の会」も積極的に力を注いでいこうという主旨で誕生しました。このような組織が結成されたことは、社会の様々な視点より障害者

問題をとらえることができ、より質の高い福祉の発展が地域で望めるという点からも私たち施設側にとっても、大変心強く思っております。

これまで近況を述べさせていたできました。まだまだ多くの問題を抱える中、それらを一つ一つ乗り越え、障害者が地域で障害幸せに暮らしていけるよう、ハード・ソフト両面の整備が展開されるように微力ながら私たちも努力していきたいと思っております。

最後になりましたが、今年度で4回を迎えることになりました。「強度行動障害療育セミナー」(11月開催予定)への御参加も心よりお待ちしております。

(石沢 英明)

東やまた工房

「近況報告と今後の展望」

現在、東やまた工房の建物周辺は工事の真っ最中。来年の5月に開催所を予定している同法人設立の入所施設「東やまたレジデンス」の基礎工事である。金網のむこう側には深い穴が掘られ、太いコンクリート支柱が立ち、毎日数10名

の職人さんが現場監督の指示のもとと身体を張って働いている。

工事用の臨時の壁のおかげで音源が目に入らぬせいか、職員が心配したほど音や周囲の変化に對しての利用者の混乱は見られず、今年度は、新しく利用者を6名(法人バックアップ作業所等では14名)迎え、スタートした。

90年7月に40名定員で東やまた工房は開所し、今年で5年目となる。この間、自閉症の人たちの地域での生活を援助するための資源として、法人のバックアップ作業所を5カ所、グループホーム2カ所を手がけ、直接援助を提供する利用者が97名に及ぶ。また、それらの運営と並行して養護学校生徒の実習受け入れ(教師との連携)や横浜やまびこ会との連携、ボランティア開拓・研修提供などソフト面での事業展開も行ってきた。

これらの事を通じて法人の大きな目標の一つでもある「横浜」という地域の自閉症児者及び家族に對するの支援体制が質量共に向上したのか、また目の前に居る彼ら彼女らの一人一人の「地域での普通の生活」を援助するための仕事に積み重ねられているか。と振り返ってみると、まだまだ足りない。

親に全面的に頼っているAさんの家庭での生活をどう自立的に組み立てるか。Bさんが会社で働き続けるためにどんな環境整理が必要か。Cさんが休日の余暇活動を楽しめるためにどんな資源を開拓するか。一人一人の望ましい生活像に基づいた援助者の課題及び利用者が習得すべき生活技術とは。そして世間一般では今だに「自閉症」という障害理解が正しくされていない事象がある(例:95・4・21付け朝日新聞朝刊『自閉症理解欠く』記事より)ことをきちんと見据えて、社会に対して関係者が代弁していくべき事は何か。

「建物」ではなく「人」の関わりが最終的には援助の質を高めるといふ事を肝に命じ、東やまた工房の機能を生かしていきたい。

(西尾 紀子)

あかりの家



あかりの家は、86年4月、兵庫県の高砂市に開設した入所の更生施設で、今年10年目を迎えました。定員は40名(男子30名、女子10名)。そのうちの30名が自閉症あるいは

自閉的傾向と診断されています。また重度の人達が多く40名中37名が重度の判定を受けており、きめ細かく生活を支えることに重点を置いている現状です。

あかりの家では、生活を支えるための手段の一つとして作業を位置付け、全員が生産的作業に取り組んでいます。作業に対する基本的な考え方として、生活全般を通じて作業時間が入所者に最も密接にかかわれる時間帯であるということから、作業という課題を媒介にして、入所者と職員の間関係構築していくとともに、入所者に対する理解を深めることで必要な援助方法を見だし、それを日常生活の中で生かしていくことにポイントをおいています。

作業種には、①空き缶・空き瓶の選別(2班) ②さをり織り③さを織り④陶芸⑤割り箸の袋入れ(3班)があります。そのうち、食品加工会社に1名、空き缶・空き瓶の選別作業2企業に9名、割り箸の袋入れ作業1企業に3名の計13名が、職場実施優に通っています。このように職住(働く場と生活する場)を分離することも生活を支えるうえでは大切な要素の一つだと考えています。

ところで、あかりの家では昨年度より新しい動きを模索し始めました。何も目新しいことではありませんが、実感が持て小回りが利く指導部運営のために組織や会議を改編するとともに、「月まどめ」と称した生活記録の様式も新しく作り直しました。その他の報告書類も現状に即したものに作り直すことで因果関係に向き合い、組織的に動けるようにシステムを整備しているところですが、すぐには成果はでないでしょうが、指導部がもつと「力」をつけ、その力を蓄積して「育ち育てあう環境」を作するために施行錯誤してしています。

最後に報告ですが、今年の3月に地域交流ホームが完成しました。現在この建物を使得、自閉的な子供達の親子体操教室を実施したり、障害児のための和太鼓教室やボランティアの研修会を開くなど新たな取り組みも始めました。

(益田 毅)

伊自良苑

「伊自良苑の近況」

伊自良苑は昭和62年7月に定員50名でスタートしました。その後

通所部門を新設し、平成4年4月には自閉症者専門療育部門(定員30名)を開設しました。この4月には通所部門の定員を20名とし、全苑百名の大所帯となりました。

平成4年、自閉症者専門療育部門の開設を機に、『あさひ寮(中軽度・高齢者棟)』『つつじ寮(重度棟)』『しゃくなげ寮(自閉症者専門棟)』3寮体制による各々の障害や能力、年齢に見合った個々人のニーズに答えられる姿を目指し処遇に当たっています。

昨年度は新規事業として、県の委託を受け、通所者を対象にしたグループホームの前段階としての自立訓練を目的とした「ふれあいホーム事業」に取り組みしました。地域の空き家を借りる事ができ、7月より毎月1〜2回実施してきました。回を重ねることに世話人の方との交流も深まり、実施日を楽しみにすると共に自立への意欲も芽生えつつあります。

本年度は、「ふれあいホーム事業」の更なる充実を図ると共に、既存する自活訓練棟を大いに活用して入所者の自活訓練にも力を注ぎ、来たるべき日のグループホーム開設に向けた着実な歩みを重ねていきたいと思えます。同様に、

3年目を迎える苑外作業班（職員の付き添いの下、地域の事業所へ出掛けるグループ）の取り組みも自立へのステップとして職場実習へと発展できるようにしていきたいと考えています。

また、平成4年度より3カ年継続事業として取り組んでいる「ふれあい福祉農園事業」も、3年目の今年は花木苗の出荷の年になっています。地域ボランティアの方々と共に汗した日々が結実の秋の、喜びの秋につながるように頑張りたいものです。

更に、平成8年度事業であるレインボウハウス（地域交流の拠点として自主生産品等を販売する）開設に向けて、自主生産品の充実と開発を図ると共に、地域の方々の日常的なつながりを一層大切にしていきたいと思えます。

新年度がスタートしました。一人ひとりが皆に確かな目を向け一人ひとりが確かな力を培っていただけるように努めたいものです。

（北村 茂）



厚田はまなす園

「強度行動障害の実態調査」

「札幌市の在宅障害者を中心に」

札幌市における在宅障害者（児も含む）を中心に「強度行動障害およびその周辺に関する実態調査」を行いました。調査結果がまとまりましたので、報告いたします。

この調査は、厚田はまなす園・石山センターを含む札幌市郊外の施設、6法人7施設で構成する「自閉症者福祉施設処遇研究会」を中心に、行政機関や医療、心理スタッフを加えたメンバーで行いました。当初この調査を行う中で白熱した論議が展開された。その理由として、強度行動障害と呼ばれる人たちが実際に在宅しているのだろうか。また厚生省基準に合致した人は施設が医療機関に保護されているのでは等であった。

今回の調査対象として33ケースを抽出、その中で10代が14名、20代が16名でした。以下調査の概要をまとめると、

①情報としての客観性

保護者による記入式で行ったが、行動障害に対する受け止め方は一様でなく、日常化された状態に対してそれほど重く感じていない方

もいれば、逆に重く受け止めている場合もあり、客観性ということでは難しい側面を持っている。

②行動障害の内容と程度について

行動障害を「食事関係・物こわし・他害・自傷・異常な動き・こだわり・睡眠障害・騒がしさ・排泄行動」に分け、各項目に重複した行動障害を持ち、その中でも5項目以上に渡っているケースが11ケースもあり、また各項目が示す障害内容を一人で14も示しているケースもあった。

③家族の介護状況

介護上の不安や健康管理面での不安を訴えており、この結果からは必ずしも豊かな在宅生活を送っているとは言いがたく、むしろ介護者の困難が読み取れる。

④社会資源の利用・施設の方角

関係機関（児相・更生相談所等）や施設等への相談や在宅援助指導等の要望が多く、各機関との連携を取っていくことが望まれよう。また在宅援助の一環としてボランティアの利用さらに施設も一つの社会資源とするなら、施設の有効利用の拡大が当然と考えられよう。今後の施設の在り方、施設間のネットワーク、シングルケーススタディ等が当然必要となってくるのである

う。

（村田 泰之）

いすみ学園

「何気ない一言」

昨年は、10周年という大きな節目を迎え、ここで暮らす人たちの生活の変遷について考えました。また、援助者としての在り方について、意識をコントロールすることが必要な時期でもありました。

日常生活を振り返ると、普段何気なく素通りしてしまうことは、作業中や生活の場面にもかなりあると思います。「この人は……」という先入観は、我々のマンネリ化した意識がもたらす現象です。前年度はこのような無意識化しつつある事の中から留意事項を2つ持ち、我々の活動計画の柱としました。具体的に言うと、生活指導よりA君を対象としたトイレト指導（詳細は略）と、B君の一時帰省に関する問題です。

ここでは特にB君の一時帰省について述べてみます。家庭事情はさまざまですが、3年程前、両親の健康上の都合により一時帰省及び長期帰省が困難になってしまっ

たケースです。当然のごとく、B君は学園に残留を余儀なくされました。その当時の我々の意識には「仕方ない事」として処理した覚えがあります。一昨年の一時帰省中の事ですが、やはりB君はいつものように残留しており、就寝時間に何気なくB君に「今度は家に帰れるといいね」とかなり不用意な声掛けをしました。B君は強い口調で「お母さんねえ、うち」と訴えてきました。一瞬我が子の帰りを待ち望む親の姿と、両親の元に帰れる喜びに安堵するB君の姿が目に見え、気が付かずに通り過ぎていた様に思えました。帰れない状況は、何らかの援助を企てた結果なのかと反省した次第です。

前年度は、B君の帰省援助で、出来得るかぎりの取り組みを模索した一年でもありました。結果的には、昨年の帰省はすべて実施した事になります。今後は昨年の実績を生かし、ボランティアも含めた組織的な援助が成立することでしょう。

組み合わせがまだ必要です。  
(堂下 勉)

「自分の思いのままに構成できる自分の生活が欲しい」「社会に近づきたい。しかし、自信がない」このような利用者の気持ちや悩みを考へて実現させようとしたのが「つづきの家」なのです。

この家は、社会に続く家という意味を込めて石井所長が命名したもので、鉄骨2階建て、管理入室を含め6部室と談話室のあるアパート形式の建物です。現在は、3名の人がこの家で生活し、地域の企業へ実習に通っています。利用者は自分で食事を作り、掃除や洗濯をするという意気込みを持って生活を始めたのですが、住んでみると簡単にできると思っていたカレーライスの調理に失敗したり、突然クーラーから水漏れしたり、洗濯中ホースがはずれて水浸しというハプニングに出会って驚かされたようです。「こないだは、混乱してワーワーわめいたけれども最近はどうしたら良いか考へて予想がつくことも多くなった」と利用者

者のMさんが話してくれました。また、夕食は一人で作るより皆で作って一緒に食べたほうがよいのではないかと提案するT君や、「今日は私が作ってあげる」と言っていたとどしく調理しているK君をかばいながら調理に腕を振るう姿が見られます。自分の事は自分です暮らしを通して、学園での生活よりも、同じ屋根の下に住んでいる人との関わりが深くなっていることが感じられます。一方、こうした「つづきの家」の生活を見聞きしている学園のクラスメイトは、この春から自発的に掃除や洗濯を始めた人がいます。また、自発的に職場実習に挑戦して見ると言い出し、6月から実習に励んでいる人もいます。

「つづきの家」の開設は、今まで自分が社会の一員になるという意識を持っていなかったり、意識をしていてもかなわぬものと意識の隅に追いやっていた人達に新しく芽を出させたような気がしています。

(山根 美江子)

石井哲夫先生の「トップインタビュー」都合により休載させていただきます。

インフォメーション  
第12回自閉症実践療育セミナー  
日時\*8月8日~10日  
会場\*霞ヶ関全社協ホール  
費用\*1万5千円  
内容\*講義「自閉症の何を理解し  
なければならぬか」石井  
哲夫/講義「乳幼児の心の  
曙」渡辺久子/「ドナ・ウイ  
リアムズ長期密着取材の記  
録」NHK取材班(予定)  
講義「自閉症の精神病理」  
小林隆児/ケーススタディ  
「自閉症の内的世界の理解」  
「自閉症の課題指導」講義  
「自閉症の内的世界」山崎  
晃賢/講義 河合隼雄  
問合\*嬉泉・石橋  
(03) 3426・2323  
第4回強度行動障害療育セミナー  
日時\*11月23日  
会場\*彦根市勤労者福祉センター  
費用\*5千円(弁当代含)  
内容\*講演「自閉症と脳のしくみ  
ー感覚統合のためにー」  
佐々木正美/講演「感覚統  
合からみた行動障害のとな  
えかた」小西紀一/パネル  
ディスカッション  
問合\*かいせ寮・守時  
(0749) 43・6111